

高貴な魔王が勇者に屈辱調教で淫らに堕とされる？

1. 第1話「捕囚の魔王」
2. 第2話「誇り碎きの試練」
3. 第3話「衆人環視の恥辱」
4. 第4話「肉体の背叛」
5. 第5話「偽りの屈服」
6. 第6話「永遠の囚人」

第1話

「捕囚の魔王」

意識が戻ったとき、バルジオの手首と足首には冷たい金属の感触があった。

視界がゆっくりと鮮明になる。石造りの壁、鉄格子、そして自分を見下ろす男の影。全身に走る鈍痛が、敗北の現実を突きつけてくる。

「やっと起きたか、『魔王陛下』」

嘲笑を含んだ声に、バルジオは顔を上げた。そこには勇者マナトが立っている。茶色の髪、平凡な体格だが、その瞳だけは異様に冷たい光を宿していた。

「.....マナト」

バルジオの声は掠れていたが、その威厳は失われていない。金髪が肩にかかり、蒼い瞳は相変わらず澄んでいる。たとえ鎖に繋がれていても、その存在感は王者のものだった。

「へえ、まだそんな目ができるんだな」

マナトが一步近づく。バルジオは本能的に身を引こうとしたが、手首の拘束鎖がじゃらりと音を立てるだけだった。

「ここがどこだか分かるか？」

「.....」

「王都の地下だ。俺が特別に用意した、お前専用の牢獄でな」

マナトの指が、バルジオの顎を強引に掴む。魔王は顔を逸らそうとしたが、鎖の長さがそれを許さない。

「その鎖はな、魔力封印の特殊合金製だ。お前がどんなに暴れても、魔法は一切使えない」

バルジオの瞳が一瞬揺らいた。だが、すぐに元の冷静さを取り戻す。

「それで？ 私を殺さずに捕らえた目的は何だ」

「殺す？ もったいない」

マナトの唇が歪む。それは笑顔というより、獲物を前にした獣の表情だった。

「お前には、たっぷりと『償い』をしてもらう。俺の村を、仲間を殺した報いをな」

「戦争だった。お前たちも我が軍の兵を殺している」

「理屈はいらない」

マナトの手が、バルジオの胸元に触れる。魔王は身を強張らせたが、後退することはできない。

「これから毎日、お前には俺に仕えてもらう。掃除、洗濯、料理……そして、その他のことも」

その他、という言葉に込められた意味を、バルジオは瞬時に理解した。だが表情一つ変えない。

「断る」

「断る？」

マナトが大声で笑った。

「お前に選択権があると思ってるのか？ 見ろよ、この格好を」

バルジオは初めて自分の状況を詳しく確認した。両手首は頭上に吊り上げられ、足首も床に固定されている。そして——服は戦闘で破れ、胸元や太腿が大きく露出していた。

「いい体してるじゃないか。さすが魔王だけあって、鍛え上げられてる」

マナトの指が、バルジオの腹筋をなぞった。8つに分かれた筋肉の溝を、ゆっくりと辿っていく。

「やめろ」

「嫌だ」

平然とした返答に、バルジオの拳が握りしめられる。だが鎖が手首に食い込むだけで、マナトに届くことはない。

「お前がこれから着るのは、これだ」

マナトが取り出したのは、黒い革製の首輪だった。内側には複雑な魔法陣が刻まれており、不気味な光を放っている。

「これは『服従の首輪』。着けた者の身体は、俺の命令に逆らえなくなる」

「そんなものは着けん」

「着けないって？」

マナトの手が、バルジオの破れた服の胸元に滑り込む。直接肌に触れられ、魔王の身体がぴくりと震えた。

「お前の意思なんて関係ない。俺が着けたければ着ける。それだけだ」

首輪がバルジオの首に巻かれる。魔法の力で自動的に締め、完璧にフィットした。

「これで完了。さて、まずは軽く試してみるか」

マナトが邪悪な笑みを浮かべる。

「膝をつけ」

バルジオの意志に反して、足首の拘束が緩み、膝が床についた。魔王は必死に立ち上がろうとするが、身体が言うことを聞かない。

「見るよ、ちゃんと効いてる。でも表情は相変わらず生意気だな」

膝をついた状態で見上げるバルジオの瞳には、まだ屈服の色はない。むしろ、より強い意志の光が宿っているように見えた。

「ふん、まだまだ時間はかかりそうだな。でも、それが面白い」

マナトがバルジオの顎を掴み、強制的に顔を上向かせる。

「今日は軽くご挨拶程度にしておくか。明日から本格的に『調教』を始める」

「調教だと？」

「そうだ。お前を完璧な奴隷に育て上げる。身も心も、俺だけのものにしてやる」

バルジオの瞳に怒りの炎が宿った。だが、それは恐怖ではない。純粋な憤怒だった。

「私は魔王だ。たとえ身体を縛られようと、心まで縛ることはできん」

「そうか？ 試してみようじゃないか」

マナトの手が、バルジオの太腿に触れる。筋肉質でありながら滑らかな肌に、指先がゆっくりと這った。

「やめろと言っている」

「嫌だと言っただろう」

その手が、さらに内側へと移動する。バルジオは必死に足を閉じようとしたが、首輪の力で身体が固まってしまう。

「いい反応だ。身体は正直だな」

マナトの指が、股間近くの敏感な部分に触れた瞬間、バルジオの身体が震えた。それは意志とは無関係な、純粋な生理反応だった。

「くっ……」

「おや、声が出たな。もっと聞かせてくれよ」

マナトの愛撫が続く。太腿の内側、股間の際、そして徐々に核心部へと近づいていく。バルジオは歯を食いしばり、声を押し殺した。

「我慢しなくていいんだぞ？ どうせ誰にも聞こえない」

「……」

バルジオは一言も発しない。ただ、蒼い瞳だけがマナトを見据えていた。

「頑固だな。でも、そのうち変わる。お前の身体が、俺なしではいられなくなるまで調教してやる」

マナトの手が、ついにバルジオの男性器に触れた。破れた衣服の隙間から露出したそれは、愛撫によって既に半ば硬くなっている。

「ほら、身体は素直じゃないか」

「これは.....ただの生理現象だ」

「そうだな。でも、これから毎日これをやられ続けたら、どうなると思う？」

マナトの手が、バルジオのペニスを握った。親指と人差し指で根元を軽く締め、そのまま先端まで滑らせる。

「あ.....」

小さくバルジオの唇から漏れた声に、マナトの目が光った。

「今のは何だ？ もう一度聞かせろ」

「言うものか」

「強情だな」

手の動きが早くなる。上下にゆっくりと擦り上げ、先端の敏感な部分を親指で刺激する。バルジオの顎が震え、必死に声を押し殺そうとしているのが分かった。

「無理するなよ。気持ちいいなら気持ちいいって言えばいい」

「.....っ」

バルジオのペニスから、透明な先走り液が滲み出した。マナトはそれを指ですくい取り、ゆっくりと伸ばしてみせる。

「こんなに濡れてるじゃないか。嘘つきだな、魔王様は」

「それは.....」

「言い訳はいらない。身体が全部教えてくれる」

マナトの手技が激しくなる。握る強さ、擦る速度、全てが計算され尽くしていた。バルジオの呼吸が荒くなり、身体が小刻みに震え始める。

「いいぞ、その調子だ。もっと感じるよ」

「感じて.....などいない.....」

「嘘をつくな」

マナトのもう一方の手が、バルジオの睾丸を優しく包み込んだ。二つの刺激に、魔王の身体が大きく跳ね上がる。

「あっ……！」

「ほら、いい声だ。もっと聞かせろ」

両手による愛撫が続く。片手はペニスを責め、もう片手は睾丸を転がすように刺激する。バルジオは必死に耐えようとしたが、身体の反応は隠しきれない。

「くそ……っ」

「諦めるよ。お前の身体は、もう俺のものだ」

手の動きがさらに早くなる。ペニスの先端から流れ出す先走り液が潤滑剤となり、ぬちゃぬちゃという音が牢房に響いた。

「やめろ……やめろと言っている……」

「嫌だ。お前が俺に頭を下げるまで続ける」

「頭など……下げるものか……」

バルジオの言葉は既に息継ぎで途切れ途切れになっている。身体の奥から湧き上がる快感と、プライドの間で激しく葛藤していた。

「頑固だな。でも、もうすぐだろう？」

マナトの親指が、ペニスの先端の最も敏感な部分を集中的に責めた。バルジオの身体が弓なりに反り返る。

「あああ……っ！」

「ほら、いい反応だ。このまま俺の手でイってみろよ」

「イク……だと……？」

「そうだ。魔王様が勇者の手で射精する。屈辱的だろう？」

その言葉に、バルジオの理性が最後の抵抗を示した。だが、身体はもう限界に近い。ペニスが一際大きく脈打ち、射精の予兆を示している。

「だめだ……こんなことで……」

「遅い」

マナトの手が最後の一押しをした瞬間――

「うあああああ……っ！」

バルジオのペニスから、白い精液が勢いよく噴き出した。ドピュドピュと何度も脈打ちながら、腹筋の上に飛び散る。

「きれいにしたな。さすが魔王、量も多い」

射精の余韻で身体を震わせるバルジオを、マナトは満足そうに見下ろした。

「どうだった？ 勇者の手で射精した気分は」

「……」

バルジオは答えない。ただ、荒い呼吸を整えようと必死だった。

「明日はもっと気持ちよくしてやる。楽しみにしてろよ」

マナトが立ち上がる。

「あ、そうそう。これからお前の食事は一日一回だ。俺が直接持ってきてやる」

「……」

「返事は？」

バルジオがゆっくりと顔を上げる。その瞳には、屈服の色はまだない。むしろ、より強固な意志が宿っているように見えた。

「私は魔王バルジオだ。たとえ身体がどうなろうと、魂だけは渡さん」

「そうか」

マナトが笑う。それは挑戦を受けて立つ者の笑顔だった。

「面白くなってきた。お前のその誇りを、完全に砕くまで続けてやる」

牢房の扉が閉まる音が響く。一人残されたバルジオは、天井を見上げた。

射精の余韻がまだ身体に残っている。屈辱的な快感の記憶が、脳裏に焼き付いていた。

だが、心は違う。心だけは、誰にも支配させない。

「魔王の誇り……か」

バルジオの唇に、かすかな笑みが浮かんだ。それは諦めの笑いではない。戦いの始まりを告げる、挑戦的な微笑だった。

こうして、魔王バルジオの長い屈辱の日々が始まった。だが、彼の魂だけは決して折れることはなかった。

それは、これから始まる過酷な調教を予感させる、静寂の夜だった。

第2話

「誇り砕きの試練」

翌朝、バルジオが目を開くと、牢房に食事が置かれていた。固いパンと水だけの質素な内容だが、空腹には代えられない。

首輪の力で膝立ちの姿勢を強制されたまま、手首の拘束だけが緩められる。バルジオは無言でパンを口に運んだ。

「おはよう、魔王様」

聞き慣れた声に顔を上げると、マナトが格子の向こうに立っていた。今日は昨日と違い、上機嫌そうに見える。

「昨夜はよく眠れたか？」

「……」

バルジオは答えない。昨日の屈辱的な体験が脳裏によみがえり、身体が小刻みに震えた。

「無視か。まあいい、今日は場所を変えよう」

牢房の扉が開かれ、マナトが中に入ってくる。手には新しい拘束具を持っていた。

「今日はお前に、特別な『お仕事』をしてもらう」

「仕事だと？」

「そうだ。勇者である俺に、きちんと奉仕をしてもらう」

マナトの手が、バルジオの首輪に鎖を繋いだ。それは犬の散歩に使うような、屈辱的な器具だった。

「立て」

首輪の魔力で、バルジオの身体が勝手に立ち上がる。足首の拘束も外され、歩けるようになった。

「ついてこい。逃げようとしても無駄だ。首輪があるかぎり、お前は俺の命令に逆らえない」

鎖を引かれ、バルジオは渋々と歩き始めた。廊下を通り、螺旋階段を上がっていく。やがて、豪華な装飾が施された部屋に到着した。

「俺の私室だ。ここで毎日お前に『お仕事』をしてもらう」

部屋の中央には大きなベッド、壁際には机と椅子がある。まさに勇者の居住空間だった。

「まず、掃除からだな」

マナトが雑巾とバケツを指差す。

「その格好で、床を磨け」

「この格好で？」

バルジオは自分の姿を確認した。昨日の戦闘で破れた服は、胸元と太腿が大きく露出している。この格好で掃除をするのは、明らかに屈辱的だった。

「嫌なら脱いでもいいぞ？」

「.....やる」

バルジオは雑巾を手に取り、四つん這いになって床を磨き始めた。その姿勢は、尻が高く上がり、太腿の筋肉が強調される。

「いい眺めだな」

マナトは椅子に座り、バルジオの作業を眺めていた。特に、お尻の部分に視線を集中させている。

「もっとお尻を上げろ。ちゃんと磨けないだろう」

「……」

バルジオは言われた通りに腰を上げた。破れた布の隙間から、尻の谷間が見え隠れする。

「そうそう、その調子だ。魔王様の掃除姿、なかなか様になってるじゃないか」

掃除を続けるバルジオの顔に、汗が滲んできた。普段なら魔法で一瞬で済む作業を、手作業でやらされる屈辱感が胸を締め付ける。

「次はベッドメイキングだ」

床磨きが終わると、マナトは次の指示を出した。

「丁寧にやれよ。俺が毎晩寝るベッドだからな」

バルジオはベッドの前に立ち、シーツを整え始めた。身を屈めるたびに、胸元の筋肉が露出する。

「なあ、バルジオ」

作業中に、マナトが話しかけてきた。

「お前、昔はこんな生活だったのか？」

「何のことだ」

「魔王になる前だよ。子供の頃とか」

バルジオの手が一瞬止まった。

「……関係ない」

「関係なくないだろう。俺はお前のことを知りたいんだ」

マナトがベッドの端に座る。バルジオとの距離が急に縮まった。